



最優秀賞

愛知県 フシミコーポレーション 株式会社
「社内ボランティアによる総合的社会貢献」事業



フシミコーポレーション 株式会社
代表取締役 専務
深谷倫光さん

選考理由

社会貢献活動審査委員会 委員
野口昇氏



フシミコーポレーションの社会貢献活動は、20年前から継続実施されている。経営者自身の指導力の下に、社員のボランティアグループが組織され、植樹、干潟や河川の清掃活動、マラソンやフットサルなどのスポーツ・イベント、中学生バスケットボール大会など多様な活動を支援してきている。これらの活動には、社員がボランティアとして参加し、地域社会の福祉や青少年の健全育成に顕著な貢献をしてきた。この社会貢献が20年という長期間にわたって継続実施され、その事業総額が8千万円に達することに敬意を表したい。

「社会貢献をしない自分たちなど考えられない!」社員教育と地域貢献が融合した驚きの取り組み



ウェルフェアコンサー
ト(上)と植樹活動
の様子(左)

社会貢献活動で重要なことは「継続」していくことにあると誰もが口にし、そのための努力をしている。

しかし、フシミコーポレーションの場合は、継続のための施策をなにもしなくても、社員たちがどんどん活動をすすめる。年間を通じて数えきれないほど活動しているが、同社の場合は「何をしているか」ではなく「何故しているか」に注目して報告する。社員たちを引っ張る代表取締役 専務の深谷倫光さんは「みんな心から楽しんでやっているからです。人のためになり、感謝されることの気持ち良さが活動を後押ししています」と言う。

それまでもさまざまなボランティア活動を行ってきた同社だが、十二年前に深谷さんは企業のありかたということから見直すことにした。まず、社員たちに入社の動機を聞いた。返ってきたのは「稼ぎたいから」という経済的な理由がほとんどだった。深谷さんは残念だった。「稼ぐためだけの仕事、お金の振り回されるだけの人生では寂しいではないですか」彼らの将来はそれでいいのか。親御さんや家族はいろいろな期待を持って彼らを育ててきたはずだ。であれば、少なくとも、自分の仕事に誇りをもち、家族にも自慢し、この会社に入って本当に良かったと思ってくれるようにしたいと感じたのだという。

もともと深谷さんは教職を目指していた。その根底でいつも「生きる喜び」とはなんだろうと自問していた。人は心の生き物だ。人に喜んでもらうことが人の本来の生

「社会貢献をしない自分たちなど考えられない!」社員教育と地域貢献が融合した驚きの取り組み



年間を通じて様々な活動を行っている



同社が発行している社内報

きる意味だと考えた。たくさんの「ありがとう」を言ってもらえるような人間を目指すべきだと。

社会貢献活動のきっかけはむしろ社員たちの教育、成長を願ってのことだった。もちろん、最初は抵抗もあった。なぜ、休みに地域貢献をしなくてはならないのか。最初の数年間、深谷さんはひとりひとりに話しかけて考えを説明し、いっしょに汗を流して楽しさを共感しながらの葛藤の日々だった。

「人に感謝されるということが、どれだけ自分を鼓舞するか体験すればわかります。どんなに理解されなくてもきっとわかってくれると信じて伝え続けてきました。そうする中で、人は誰でも喜ばれる存在なんだ、自分は決して一人じゃなかったんだ、沢山の愛や支えがあったんだと、素敵な自分の可能性に出会うことができます」大切なことは、一人ひとりの将来をより具体的にイメージすることだという。「こんなふれあいができればいいな、この人にはこんな役割を任せたいな」ということを明確にビジョンにして伝えれば社員たちにも必ず伝わる。この12年間で深谷さんは確信したそうだ。

今では地域委員会もできて、社員たちが自主的に新たな貢献活動を考え出すようになった。仕事の分担をシフトし、休日に集まって打合せなどを行っている。全て社員たちの自主的な活動だ。

「そういう姿を見ると、涙が出てきますね、12年前の私のイメージよりもずっと進んでいます」と深谷さんは感慨深く振り返る。社員たちは成長し、深谷さんがいなくても積極的に前進し、変化にも強いチームになった。たくましく頼もしいチームになりつつある。社会貢献活動と社員教育が見事に一致しているのだ。同社の貢献活動はあまりにも数が多いため、ここではあえて紹介はしない。ただ、同社にはエピソードがたくさんある。

ある社員は最寄り駅からホールまでの経路にあるゴミを毎日すべて拾って通勤する。あるお客様はホールで元気に挨拶をされて自殺を思いとどまったと感謝してくれた。また、末期癌のお客様の奥様がお店に来られて、「主人はここで過ごすのが一番の楽しみなので、余命いくばくもないがよろしくお願いします」と伝えていった。亡くなられた際には、スタッフはみんなで線香をあげお別れを告げたそうだ。

同社のホールに寄ってみた。スタッフたちはスキップするような足取りでホールを動き、お客さまに声をかけていた。「ありがとうございます」があちこちに聞こえる。お客さまへの気配りやおもてなしがそここに感じられた。正直驚いてしまうほどだ。「地域に愛されるホール」、言葉でいうと薄っぺらくなってしまうが、そのひとつの理想型がここにある。